

第二十回 新城薪能

と き 平成二十一年八月二十二日(土)
午後五時三十分始
ところ 新城文化会館大ホール

能 組

仕舞 養老 白井里歩
七騎落 榎本美月

仕舞 国栖 川村美幸
敦盛 村田昂平
鞍馬天狗 今泉尚美

火入式

新城市議会議長 丸山繁治
新城市教育委員会 菅沼昌人
委員長職務代理者

午後6時頃

連吟 忠 度

シテ 永田聡子
ワキ 今岡アイ子
地謡 夏目みよ子 鈴木富代
伊藤秀子 竹下京子
太田温子 小林寿枝

あいさつ 新城市長 穂積亮次

狂言 清 水

大郎冠者 天野雅夫 主人 山本 勝
後見 酒井 宏

仕舞

草紙洗小町 太田温子
西王母 夏目みよ子
羽衣 伊藤秀子
絃上 鈴木富代
葛城 小林寿枝
松風 竹下京子

午後7時15分頃

小舞 名取川 大原正巳

舞囃子 猩 々 長田共永

大鼓 清水利高 大鼓 鈴木崇史
小鼓 星野弘子 笛 今泉英三

狂言 千切木 太郎 佐野泰三

当屋 大原正巳
太郎冠者 酒井淑規
客 清川松佐
客 加藤賢一
客 小沢貞博
客 山口俊一
客 加藤久和
女 水谷至男
後見 酒井 宏

午後8時頃

能 羽衣 杉浦史佳 ワキ 桜本泰朗

舞込

後見 粟谷明生 太田康弘

大鼓 清水利高 太鼓 中嶋康夫
小鼓 森田收 笛 今泉英三
渡辺敏康 佐藤陽
太田研司 中村邦生
鈴木崇史 栗谷能夫
牧野修 栗谷浩之
長田共永 竹内省吾

附 祝 言

(終了予定午後九時頃)

主催 新 城 市

新城市教育委員会

主管 新城市文化事業運営委員会

新城市文化事業行委員会

後援 新城市文化協会

新城市文化協会

新城市老人クラブ連合会

愛知 知 県

愛知県教育委員会

(財)愛知県文化振興事業団

新城市市政記者クラブ各社

あらすじ

狂言 清しみず水みず

茶の湯の会を催すことになった主人は、茶に使う水を野中の清水から汲んでくるようにと、太郎冠者に命じます。太郎冠者は行きたくないのですが、主人が大切にしていた手桶を置いて帰り、清水に恐ろしい鬼が出たと報告をします。主人は大切な手桶を清水まで取りに行くと言いつつ出します。太郎冠者は先回りをして鬼の面をかぶって主人を脅かします。あわてて逃げ帰った主人は太郎冠者と鬼の声が似ていることに気付きます。さてさて、どうなりますか・・・

狂言 千切木ちぎりき

連歌の会を結成した主人は仲間を集めに太郎冠者を使いにしますが、嫌われ者の太郎だけは呼ばないことにしました。みんなが集まり、連歌の会が始まりますが、仲間はずれにされた太郎がやってきます。

太郎は自分が呼ばれなかったことに腹を立て、生け花や掛け軸にケチをつけます。怒った一同は太郎を打ち倒し、散々踏みつけて、追い出してしまいます。これを聞いた太郎の妻、太郎をけしかけて仕返しに向わせます。根が臆病な太郎、妻への手前、千切木を手を持ち、喧嘩相手の家を訪ねます。さてさて、どうなりますか・・・

能 羽衣はごろも

のどかな春、駿河国三保の松原。漁夫白龍は浜辺の松に掛けられた美しい羽衣を見つめます。その美しさに惹かれた白龍は、家にこの羽衣を持ち帰ろうとすると、どこからともなく天女が現われます。「その羽衣は私のものです。返してください。」と天女は白龍にいます。白龍はそれを聞き、ますます返したくなくなりません。

天女は嘆きながらいます。「その羽衣がないと天に帰ることができません。」その哀れな天女の様子を見た白龍は、羽衣を返す代わりに天女の舞を見せて欲しいと頼みます。羽衣をまとった天女は天上界の様子を語りながら、三保の松原の美しい情景を背景に、「序の舞」を舞います。やがて、天女は富士山の方向をさして霞のかなたへ帰っていきます。

新城と能楽

新城の能楽は新城の歴史とともに始まりました。長篠・設楽原の戦いの後、長篠城の城主であった奥平信昌は、徳川家康の娘亀姫と結ばれ、新しいお城を郷ヶ原に築きます。これが新城という地名の始まりです。そして、天正四年（一五七六）、その落成祝いに観世与三郎を招き、城中二の丸で祝い能を催したのが新城の能楽の始まりです。

その後、元文元年（一七三六）、領主管沼定用の家督相続を祝い、富永神社で能を奉納しました。これが例となり、祭礼のときに地区の氏子が社前で祭礼能（市指定文化財）を奉納するようになりました。富永神社には文政九年（一八二六）に再建された能舞台（市指定文化財）があります。この境内で町衆によって二七〇年余り、祭礼能として続けられています。

薪たきぎ 能のう

この名称は、夜になって薪を炊いて、それを照明代わりに演能するところから来た名称ではありません。もとは「薪の神事」などと称して、新年に薪を寺社に献進する儀式で、一種の春迎えの信仰行事でした。

新城においては新城文化会館が完成したことを契機に、平成二年第一回「新城薪能」が新城市文化協会によって催され、大好評を得ました。新城薪能は富永神社で行われる祭礼能とは別に、流派を問わず誰でも参加でき、まさに「能楽の里」を目指す行事であり、その想いは今も生き続けています。現在、日本全国で二百か所ほど薪能が催されていますが、新城薪能のように、シテ方、ワキ方、囃子方、狂言方の全てが素人というのは、ほとんど例を見ないといわれています。このような新城薪能を、永い伝統を持つ富永神社祭礼能とともに、維持発展させていくことが私たちの願いです。